

竹島雜誌 全

特31

308

下

多氣志樓主人著

竹島雜誌

東京 青山堂藏梓

竹島雜誌序

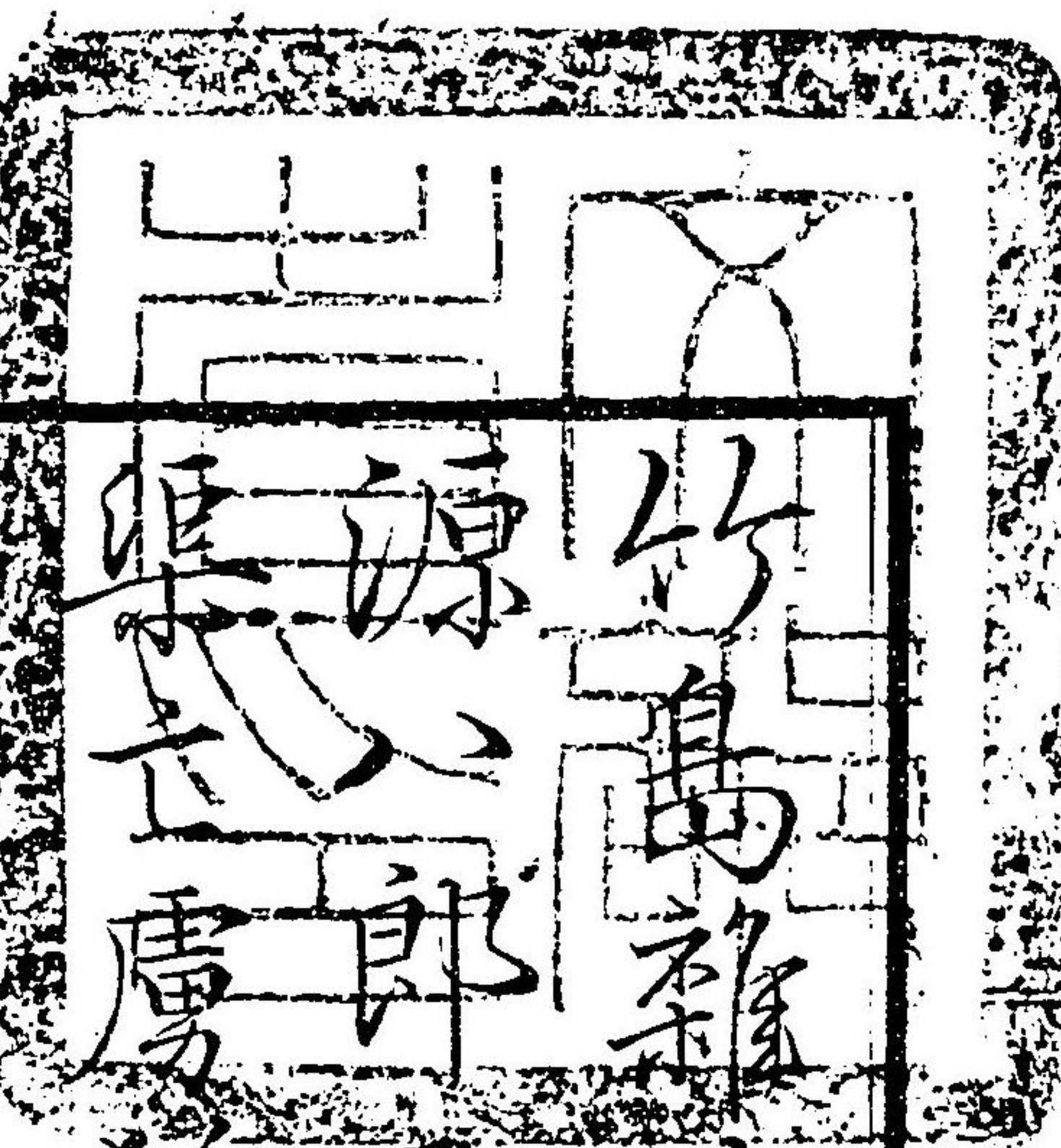
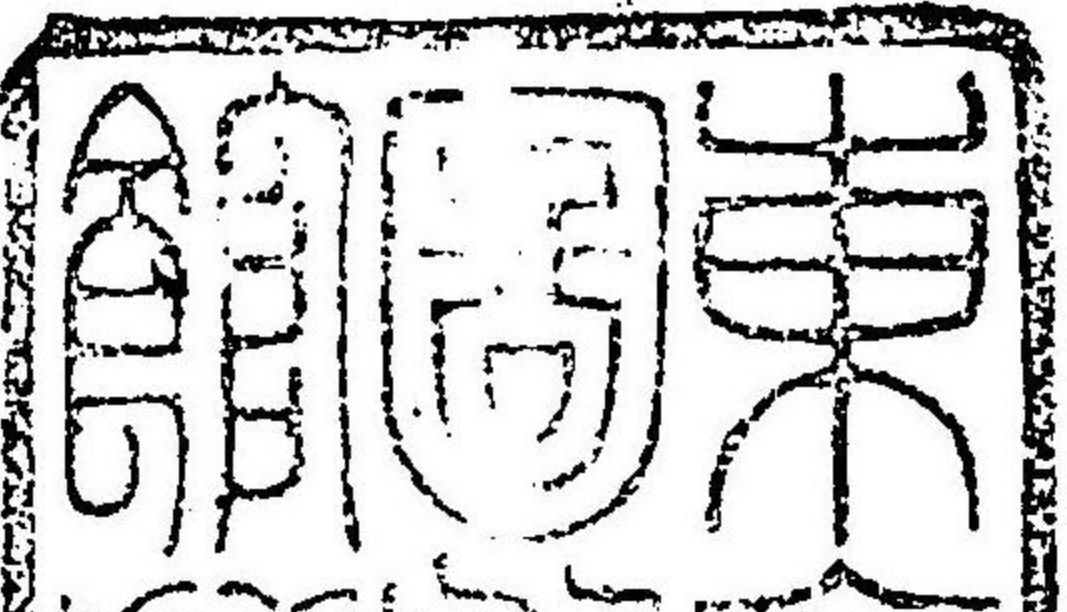
源一郎 取琉球源九郎服蝦夷

集六 廣猶能為之 而當斯開化

秋棄我版圖付諸不問所以

滿川氏之不振也松浦竹四郎

有慨于此嘗航蝦夷圖其山川

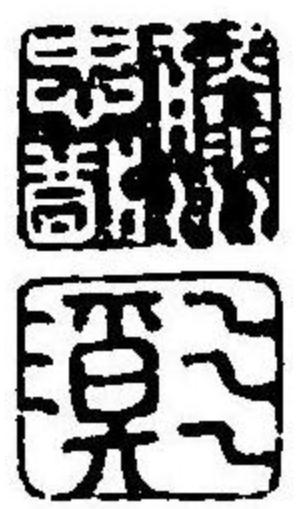


度其土宜著書以陳開拓之便
已而
朝廷大開北海道竹四郎功居
多云頃竹四郎又著竹島雜誌
屬序于予予夫叢爾小島固非輟
夷之此予知其易為力也異日

國家有事于朝鮮此島必將有
所用豈得以叢爾不問之乎嗚
呼在上之人果能讀此書施諸
行事二源之事蹟不且言也予
因德憑刻之

明治四年辛未六月

藤川忠猷識



関忠教書



竹嶋雜誌凡例

一地理の肝要ある事不肖今贅言多し及リて皆去るを以テ
 項年々其事ヲ識者心と盡さるる有坐るに之を龍動リョウドウノ
 蟹呂巴里斯バリスノ美麗人々を志す者亦く山海數万里を隔
 つ地ノ盛衰動亂も月を越りて知る豈も是太平の餘澤あり
 未や然るを知らざるをばば竹嶋ありとの誰も是を説く
 人はずと志す人も稀あり去る癸丑の秋より等海より數千篇を
 見ふに蝦夷エゾ樺太クハタ琉球リウキウ孫ソノ伊豆七島イヅセツシマ各人々及ふものほ
 ともいふ竹嶋タケシマの策をんを依て此一巻を編輯し之を以て
 竹嶋雜誌と名を冠らしむるものなり

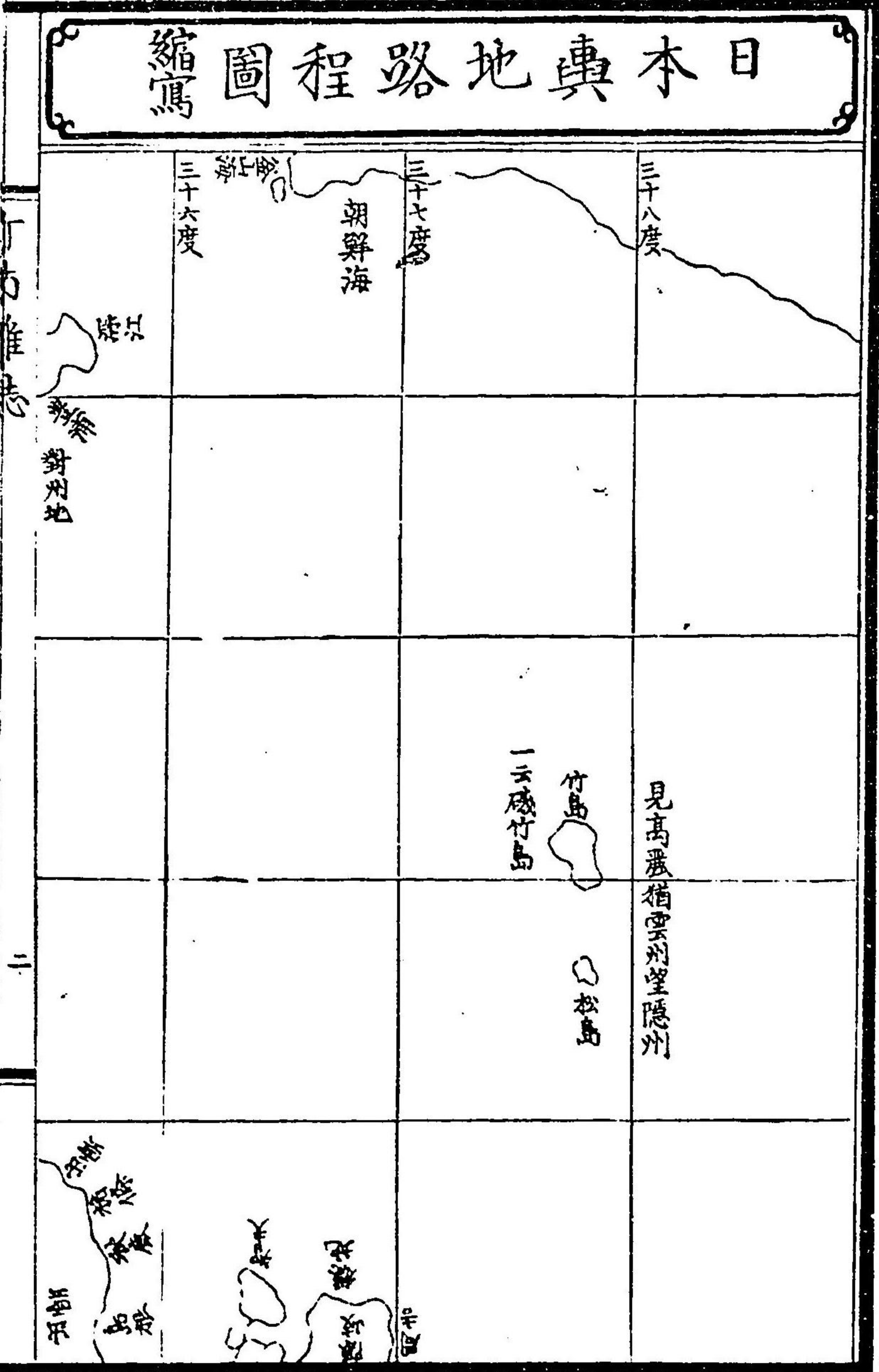
一其編澄けりといふも街説里譚と不用物を引用の書に據り
編をいふもの意延びてくるものなるは余が杜撰に
関者見りしを云

一雖然を引用するものと漢文獵人の語を以て記したるもの
は元陶金家の書に
北海随筆より林氏が三國通覽を著る原書とありは同
諺なりといふ関者故に蔑視したるなり

松浦武四郎 弘

明治三庚午のやし仲ねはるに谷馬角三法

日本輿地路程圖縮寫



一本此島三ツ又離島方々
高十丈許平方一尺

竹島 之圖



周十五丁

瀬戸三十間

往古人家跡あり

高五十丈許

岩高十丈許

暗礁あり

岩壁あり
上松あり

高五十丈 恐らく高
四十丈

本島十丈
九丈五丁
周十八丁

一本此島
卯辰二丈



北 国

三本

一本此島
高十丈許

一本此島
高十丈許

一本此島
高十丈許

一本此島
高十丈許

竹浦 往古
往古 住居あり

瀬戸 船屋多ク
瀑布あり

暗礁あり

瀬戸 船屋多ク
往古 住居あり

一本此島
高十丈許

此は大坂浦下也

一本此島
高十丈許

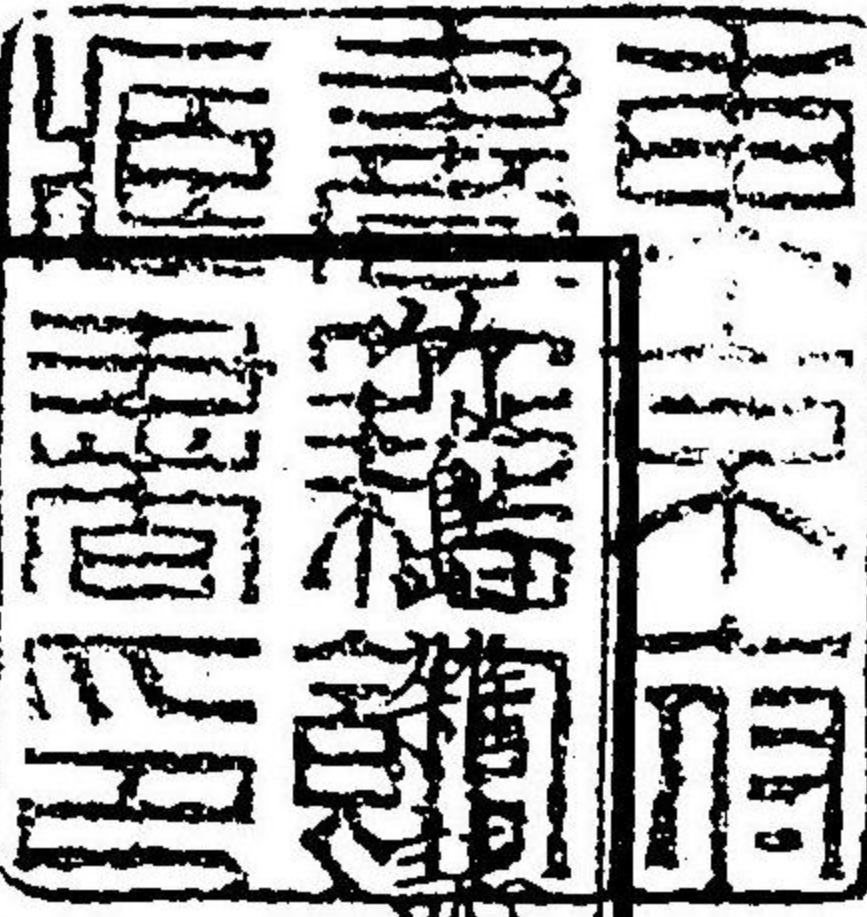
立岩
高廿五丈
周五丁

大岩壁あり
一本廿丁
一本二十丁

南

引用書目

- 一 日本風土記
- 一 日本輿地路程圖
- 一 現存六帖
- 一 懷中鈔
- 一 東涯隨筆
- 一 草廬雜談
- 一 金森建築筆記
- 一 宗對馬守義功家譜
- 一 隨書
- 一 大清一統圖
- 一 北史
- 一 伯耆民談
- 一 竹島圖說
- 一 太平年表
- 一 長兵衛竹島をふし



總說

松浦武四郎阿倍弘 編

他計甚麼如証風ゆの竹島と書と此島大竹叢東岸大坂りり
 其竹極多々々天ふるを周圍二尺斗ふるを竹島依りり
 やまと舳羅島隨書なる名りり

東涯隨筆に此島城の舳羅島と云はるるを余按
 るる舳羅島と云ふものを筑紫の沖にありて島と稱す云う九か邊
 くの聲者どもいふにたゞるる考ふるに鯨イナヅカ若人臣の一代記と云ふものを
 讀みし所を門附の歩行りし其又句を考ふるに舳羅島

産波の對馬の東の極は同傍りたること東渡隨筆に周圍四千里
 と云ふ此竹島もまた南邊に大日本東を危し角に被るは
 以は是の事今の世に人知るゝありはるに志事かと思ふ事
 周の志は北史卷十四倭傳遣文林郎裴世清使國度百濟行
 至竹島南望耽羅島云云これ竹島も別なることありて
 竹島を日本と離るるを却て漢土と近く境内影る
 廣活多島あり 伯耆民後隱岐の北松島島の西島 松島の一小属島あり 土俗略に決意と云 より海上
 是則凡四千里條北より 竹島圖説は統制公府に在りては竹島 極高三十七
 度五分八厘云二十八度二分 日本輿地路程圖 大清一統圖
 里俗の説は隱岐より戊寅の万里里計りて石見より庚子の方八

十里長おと金子丑の南を今凡九十里と抄りたるは
 是を只凡の言傳へるを證と爲すも、
 朝鮮元渡海は釜山浦の漢へは名十八里夜に到るを彼
 と灯を民家の燈たりと云ふはゆゑと渡海に船入る 伯耆民後
 橋を多し是を誤るあり

南に見高嶺猶雲州望隱州 路程 考出たりと云ふ古歌
懐中抄 いふこと 竹島の島 今に 竹島あり
現存六帖 竹島あり 今に 竹島あり
 按はる小此後歌を近江湖中なる氣を云ふ
 其地形之角りて周圍凡十六里條産物者多し一奇島あり

潤山嶽終間けりて大竹喬木蕃茂し法多禽獸多く魚鼈
 介類素より穢惡なり元満りて産物是なる島とて如紙此
 島を竹斯國竹島北史倭傳とて我々の島と稱する多し草廬此
 伯耆末子の町入大谷村川の由氏代名けり町入を子孫を
 今も町年事と勤む此島入竹島濱海免許を蒙ることを當
 國前大守中村伯耆守忠一紙
 慶長十一年に卒去りて嗣を遺さざぬ跡を對て尔來
 元和二年に國主ありて所封とあり然るに依りて城代
 一々年々武郡より來りて當保に在りて伯耆と鎮護を民談
 同年阿部四郎冬終在るは此時氏竹島濱海ありと希り

高きより望み民談

元和三年丁巳松平新左郎光政御當國を管領し入部りて
 上りて入部りて形を承りて光政にやうを武郡に告り許さる
 竹島を先押濱海濱を承りて後承り濱濱不徒急日
 同四年那由商を江府より召きて免許の兩朱印を賜ふ但し直に
 由商へ賜ひて一日烈侯勳を以て後一々年拜領之日
 此年より兩商を將軍家の拜謁を辱みしを時服を拜受し竹
 島の名産蛇を奉貢を授はるを時と曆を由商の内一名元と召
 して隔年より見よ定之を承りて因説
 是より依りて由商家を濱濱海に遷すを授せしより七十四年

船しと悦ぶるに其実を急退べき状態より我輩の上
 陸する者も築造する小屋と検査するに獵取の艘と決つて由
 りと乞と郡の象^{ツツ}昏の價やど坊浦へひとをりと答ふ加う系舟を
 居へんと強きとに彼を衆より我を寡衆寡固より敵を
 うに恐懼の情ふまて能くは敵を以て二月廿一日晚七ツ時
 出帆せり但し串免笠頭巾味噌麴一九と携へ出帆し此を
 這田の濱海の岬とぬんるを三月廿日石倉漢田の岬の雲
 舟と獲る同日みり七ツ時伯あ米子へ歸る<sup>其の元和の
入るなり</sup>
 翌酉^{元祿の年}濱海より唐入數多濱を家居を設け漢

獵と恐るに于以る氏討策を急る唐人多人連舟り米子未だ
 同年四月廿七日未の下刺濱町太谷丸右衛門宛に入封る多人あり
 趣る人の唐人を連舟帆の事と大守を懇る遂に武都の沙
 浜より去る也 民終

竹島因説翌元祿六癸酉の年庚二月下旬再び米子を出帆
 して夏四月十七日未の刻竹島より然るに昨年の如く船人
 多し候獵り我と妨げ初めしはそ不軌の怪言を放し和
 事ありと止むるとはたは中の長者一名と火伴ある輩を延ひ
 して我舟に入き四月十八日竹島より出帆して廿八日米子へ歸
 きて其時我國侯^{杉平伯}と新ふ國侯とて之を以て却定奉新

制可申付方被

仰出可存之趣此惶謹言

元禄九年十二月廿六日

土屋相模守在判

户田山城守

阿部豊後守

大又保加賀守

松平伯耆守殿

元禄九年因藩國之於鮮國之旨竹島之
唱在島方之旨其意必入合之旨其意
不可在之旨其意必入合之旨其意

被禁在從

公儀被 仰出在後朝鮮國禮曹參判上

宗光使者之令之年より再度之旨其意必入合之旨其意

及入銀之錢今年正月廿八日義真之旨其意必入合之旨其意

暇被來下之旨其意必入合之旨其意必入合之旨其意

無益之旨其意必入合之旨其意必入合之旨其意

仰出在義真之旨 仰出在義真之旨

之上同年十月於船之旨其意必入合之旨其意必入合之旨其意

右被 仰出之旨其意必入合之旨其意必入合之旨其意

論被在濟者

此餘餘... 元禄十一年... 及べり... 按より... 享保九甲... 尾也... 一々... 一々

元禄十一年丑の秋米子の布人村川市兵衛江越に出た然併又
及べり竹島... 按より小官は村川大谷商人の... 享保九甲辰年... 尾也... 一々... 一々

風土

借其島伯州會見郡濱野日三柳村より隠岐の後島は二十五
六里ありは遠見の考を以て朝鮮の山と名を凡四千里と
抄より中森建

建策考は朝鮮の山と名を以て鬱陵山ありと... たりは... 長兵衛石が... 小島町と云ふに死を

其地は凡二里半四里を不満と云南北凡六七里あり也周
圍凡十六里と云り此の九ヶ所の岩岬より

北國浦とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ 大岩岬とつへり又出づ

岩岬と云ふ少し狭く此邊海の方平山小く樹木多く又竹叢つゝあり浦と一ツの岩岬を思ふ辰島はあり
此方奥の二所半一説二十町とあり島は四方周りに石が積り磯は巴の方よりあり
浦と一ツの岩岬を思ふと彼大坂浦は出るなり
長兵衛竹島

産物

此島中峻嶺多く樹木甚だ浅し又瀑布多きより東より南より一ツの奇泉あり此の水清く味甘美あり一り又漸く一升毎湯出たり伯耆氏

竹島図説此島は甘泉あり鹿や異なる井泉あり又浅沙浜を然るともいふこと実を記す

實に此島の奇鳥なりまゝと鮫糖を食ふと大く乞と串鮫引て産物として凡日本著く賞玩を所諸絶と稱する事あり
此島に産する竹と梳を海中に沈め置くと形は揚子木葉に附く鮫恰も生木子の如くありと云ふ也伯耆氏
此島に生する猫は尾短く曲ありと云依て常は曲尾あり此を世人號して竹島猫と稱するなり多くは乞虎生の如きものなり民共

- 胤 告天子 白頭翁 金翅鳥 白頬鳥 鷗
- 鷓鴣 綉眼 燕 鷲 角鷹 鷹 穴鳥

竹島談話 一程の燕は岩窟に棲む如くは

りりあそ 人參 鮑 鱸のころふとゑらるるしとくみ子
よりゆき酒海の人此三品をいひても多く携へゆきを
持ゆしとをたはしとくみ子 記 如武元系が版圖たると
物つくとくみ子天度の中ふを揚をよの順天府系
東京とみふしとくみ子海客を船泊と容るる地多く山
樹木多くあそ松と生し竹を本邦薩の大り平と除くの外地
は比るるあそく又島中大蒜野蒜とあそくをを産するの
地りく七金と生せるとくみ子更く未だ関工と得だ洗んや辰砂
綠青とあそくは山く人參と然るとくみ子地り藥
品も索るゆきとくみ子海は鮑りり鱸りりとくみ子雜貨のふ

ま事必せり如此の地とくみ子今又用物者乞と意鳩は比
置とて深慨のふりま筆と東京日は谷ある馬角齋と括し奉
新ふたふとくみ子海は鮑りり

りりあそくみ子

竹島雜誌大尾

と何らさ—その名天のわに—海はあまきい
り—き—と—あふみ極素なるぬいありわ
く井と雲の人—に極素の松浦と取らるる事志橋
にたへ—よめい法—うと極素人のあまきい行るふ
し原か—と—さえぬ—の名よ井より竹嶋雜徳—よ
一筆—のせ—り—よ—に—あ—た—る—を
海^{ワタナカ}中の雜徳いひゆ—る—む—れ—よ—に—た—る—

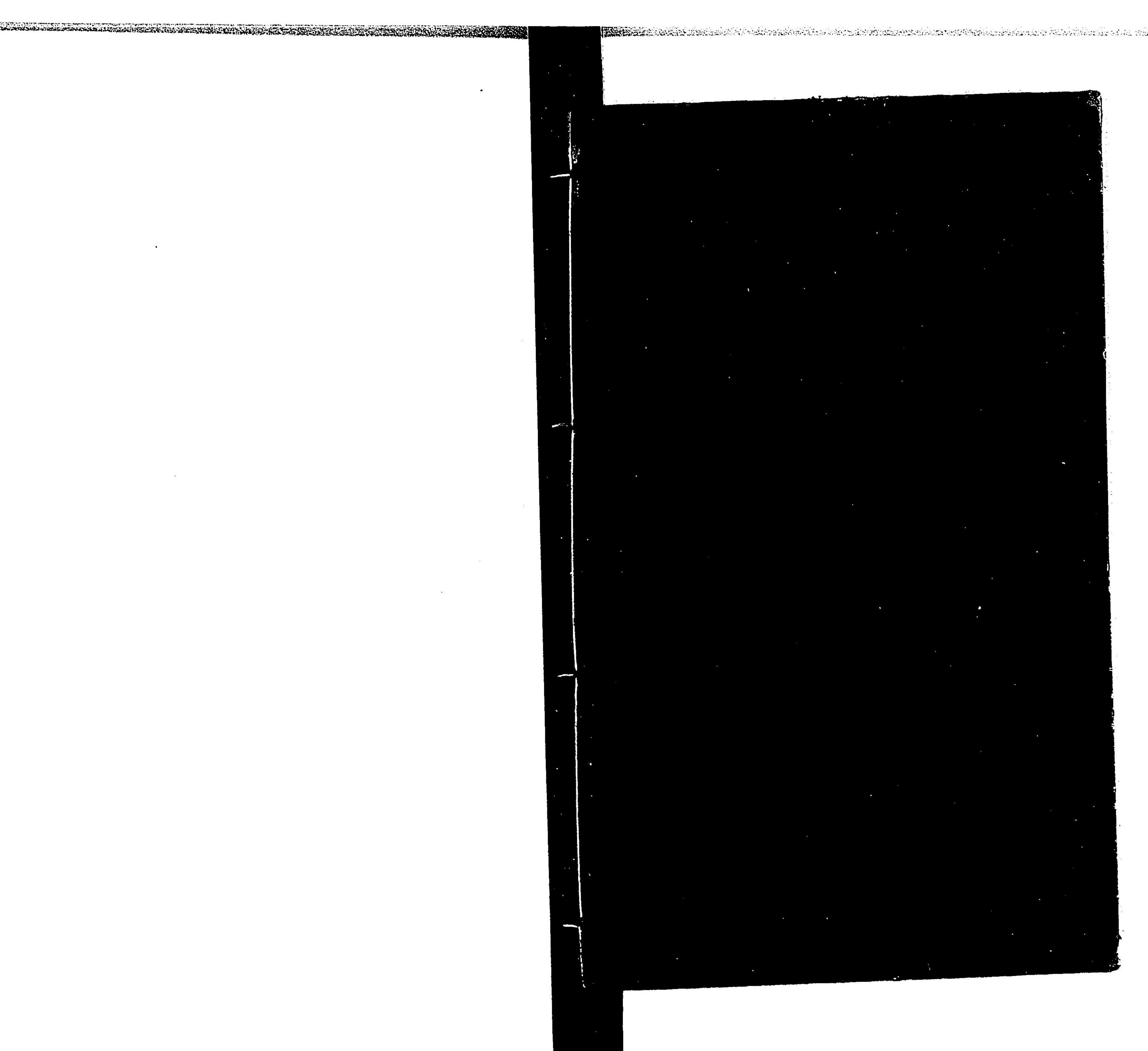
人—と—ま—れ—た—あ—る—は—ら—い—ふ—と—あ—る—も—あ—る—
み—と—あ—る——甲—れ—た—を—あ—る—あ—る—む—れ—の
あ—る—の—あ—る—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—
—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—
—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—
—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—
—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—
—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—の—あ—る—

孝行しき人なり。不徳者の名。一人とのこ
いふ。おのちの世に。おのちの世に。おのちの世に。
ぬ。おのちの世に。おのちの世に。おのちの世に。
國様。おのちの世に。おのちの世に。おのちの世に。
本出ウダスチ行ウダスチハ。おのちの世に。おのちの世に。おのちの世に。
あ。おのちの世に。おのちの世に。おのちの世に。

宦准 松浦弘著述

明治四辛 未歳冬十月開雕

東京書林 鴈金屋清吉發兌



特31

308

本

025902-000-6

特31-308

竹島雜誌

松浦 武四郎/著

M4

ADC-3459

